

スピリチュアリティと宗教教育

— 宗教科教育法の授業実践に向けて —

Spirituality and Religious Education:
Toward Constructing a Better Religious Teaching Curriculum

野 口 真

Makoto NOGUCHI

要 旨

宗教科教育法の授業実践に向けて、スピリチュアリティと宗教教育に関する部分をまとめた。「スピリチュアリティ」という言葉は、多領域にまたがって、意味や用法も統一されないまま用いられているが、その二重性が媒介性ともなり、異なる領域を結ぶ可能性も示されている。しかし、同じ「スピリチュアリティ」として、医療におけるスピリチュアルケアと占いやパワースポット等のスピリチュアル・ブームが同列で扱われる危険もあり、質的な差異を区別する手立てが求められている。先行研究の中から、「問い」と「答え」の次元を区別してスピリチュアリティを捉える方法について検討した。宗教科教育で用いる際には、さらに他の問題領域との関係を整理する必要性が示唆された。

1. この授業の位置づけ

(1) 講義全体の中での位置づけ

この「スピリチュアリティと宗教教育」の授業は、宗教科教育法のうちの第3章「宗教的情操に代わるもの」に含まれる。この章の前半は、「日本的宗教観と宗教教育」をテーマとしたが、そこで取り組む内容については先にまとめた¹⁾。この日本的宗教観の問題に続けて、この章の後半で取り組もうとするのがスピリチュアリティの問題である。

講義全体の流れの中にこのテーマを置いてみると、やはり少し特異な印象があるかもしれな

い。これまでの教育史の学びにしても、日本的宗教観にしても、この日本の中での宗教教育に限定して問題を探ってきた。特に「宗教的情操」というきわめて曖昧な用語の問題性を、日本の過去や現在の状況との関連に見てきた。ここでスピリチュアリティを取り上げようとするのは、そのような曖昧さの中に埋もれる「日本的」状況を打ち破る視点を、外側に求めていこうとすることでもある。ここで英語由来の用語をキーワードとして使うのも、何か象徴的なことかもしれない。

以上のように、ここではこれまでの講義の流れからはできるだけ飛び立っていくことを目指す。それは、「宗教的情操」のこちら側でそれを批判し、穿つという作業から、それに代わるものを求め、あちら側に新たに立ち上げる作業に移るということでもある。そのことにより、日本的宗教観に絡めとられ、個としての宗教意識を確立し難い現状から、少しでも浮上して宗教科教育を展開できる可能性を探っていきたいと思う。

(2) 「宗教的情操」との関連

講義では、第2章「日本の教育史と宗教的情操」において、教育史を概観しながら「宗教的情操」の問題性を捉えてきた。私自身の研究としても、先に宗教教育の課題としてこの宗教的情操の問題をまとめた²⁾。問題の所在を確認しておく、「宗教的情操」とは、何らかの宗教的価値観を汎宗教的に捉えたものであり、それらは脱宗教化して教育に取り入れることが可能だと考えられたものであった。そして、それらが道徳律やモラルの基として機能することが期待されてきた。しかし、曖昧さを良しとする日本の特性の内に、この「宗教的情操」の意味内容も曖昧さが強いものであり、教育においてはそこにかつては国家神道の宗教儀礼などが侵食していった。明らかに宗教的なものが宗教ではないとされ、国家権力と一体化しながら教育が侵される事態が生じたわけである。

戦争が終わり、民主国家として生まれ変わってからは、そのような心配は杞憂に過ぎないという意見もある³⁾。確にかつてのように現人神としての天皇を掲げ、剥き出しの暴力を背景に学校教育に国家神道の儀礼が持ち込まれるということは考えにくいかもしれない。しかし例えば、すでに1948（昭和23）年に排除、失効の国会決議がなされたはずの教育勅語について、その内容や精神には問題は無いとして、教育現場に復権させる運動が続くなど、特に精神的な面での回帰の動きは強まっているように見える。当時のことは宗教的に何が問題だったのか、そのことに対しては今なお曖昧なままなのである。このような状況では、またどのような価値観が疑似宗教の装いをして教育の場に現れてくるか分からない。

道徳の教科化が、2018年4月の小学校を皮切りにいよいよ実施されていく。教科書の検定、採択も終わり、出番を待つばかりとなっている。特にその中でも、内容項目「主として生命や

自然、崇高なものとの関わりに関すること」に関わる教材とその記載のあり方が注目される。この内容が、とりあえずは現在の「宗教的情操」を示す具体的資料となるはずだからである。

以上のような問題意識を持ち、また現状認識を元に置きながら、スピリチュアリティと宗教教育について探っていきたい。「宗教的情操」に代わるひとつの可能性として、スピリチュアリティについて捉えていければと思う。それは、「宗教的情操」が映し出してきたものとはどう違うのか、あるいはどの部分は重なっているのかを見極めていくことができればと考えている。

(3) 日本的宗教観とのつながり

前節では「日本的宗教観」の問題について学んだが、「スピリチュアリティ」というテーマは、一旦はそこで見た日本の状況から離れて、世界的な視野から見るということになるかもしれない。しかしその後、また私たちはこの日本的な状況に、曖昧さを特徴とする靄のような宗教心を取り巻く日本の状況に立ち戻らなければならない。私たちはそこに立ち続け、そこから課題を汲み上げながら宗教科教育の授業を構想しなければならないのである。

すでに見たとおり、自分自身の中にも曖昧さに安住する「日本的」状況はあり、それは意識できないほどに身に染み、板についたものとなっている。善し悪しの問題ではなく、そのような文化と社会の中に私たちは生まれ、育ってきた。それは否認すべきものではなく、正直に見つめ引き受けるべきものなのである。

「日本的宗教観」は、宗教的行為を日常に潜む非日常的な瘤を乗り越える術とし、宗教を手段化するものであった。その中では宗教性は曖昧にされ、生活習慣や慣習に紛れ込んでいきがちである。また個人の宗教意識の確立も、それによって阻まれがちとなる⁴⁾。宗教科教育の課題としては、特にこの宗教意識の問題を、児童生徒の個の確立との関連の内にみなければならない。この点からも、スピリチュアリティのテーマを通して、児童生徒を含めて我々が置かれている状況を一度俯瞰することにより、現実に対して新たな一步を踏み出すことができればと願っている。

2. スピリチュアリティとは

(1) WHO（世界保健機構）健康の定義改正案

日本でスピリチュアリティという言葉が注目されたのは、1998年にWHO（世界保健機構）で健康の定義についての改正案が提案されたことがひとつの契機であった。以下、公益財団法人日本WHO協会のホームページ⁵⁾を元にしてまとめる。

まず、健康についてWHO憲章の前文では次のように定義されている。

Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.

健康とは、病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることをいいます。(日本 WHO 協会訳) これに対して、1998年に提案された定義は次の通りである。

Health is a dynamic state of complete physical, mental, spiritual and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.

読み比べて分かるように、加えられたのは *dynamic* と *spiritual* の 2 語である。健康とは静的な状態ではなく、疾病と健康とは連続する動的な関係にあるということを強調するために *dynamic state* と表現され、さらに *physical*、*mental*、*social* に加えて *spiritual* に満たされた状態にあることが健康の要件であると示されたわけである。

この提案は執行理事会では可決されたが、総会では緊急性が低いなどの理由で審議されず採決も見送られたままだという。しかし、提案された段階で大きな話題となり、日本でもスピリチュアルという言葉が一般化するきっかけとなった。ただし、日本においてはスピリチュアルの意味については明確ではなかったといわれる。

日本語では、*mental* も *spiritual* も同じく精神的と訳してしまいそうになるのは、宗教に希薄な国民性のためかも知れません。ともあれ、どう翻訳すべきかを考えてみることも、私たちが「健康とは何か」を考えるヒントのひとつになるかも知れません⁶⁾。

確かにここで言われている通り、*spiritual* をどう訳すかは難しい問題であるだろう。無難なのは「精神的」であるだろうが、これは *mental* の訳語となっているため使えない。「宗教的」というと既成宗教の信仰という意味合いに取られ、狭められてしまう。この文章の訳としては「靈的」という言葉が充てられることが多いが、この言葉も受け取り方が様々で、意味を共有できているかどうかは疑わしい。先の日本 WHO 協会からの呼びかけのように、これをどう訳すかと考えること自体に意味がある状態に、未だに我々はいるのかもしれない。

(2) Spiritual but not religious (SBNR)

WHO の健康の定義に *spiritual well-being* であることが加えられようとした意味を、もう少し考えるために、SBNR と記される信仰的なスタンスについて考える。SBNR とは *Spiritual but not religious* の頭文字を取った表記であり、*religious* (宗教的) ではないが *spiritual* (靈的) であるという立場の自認だとされる⁷⁾。この場合の *religious* と *spiritual* の区別は、前者が既成の宗派や教義を明確にした宗教への参加という公的な領域であるのに対して、後者は私的な体験や思考を元にした領域のことを指すことになる。つまり SBNR であるという自認は、既成の宗

派宗教（西欧においては主にキリスト教）は信じないが、私的な宗教的体験や霊的な存在などは信じるという立場を表明するものになる。

このような立場の広がり、WHO の健康の定義に spiritual を加えようとした動きに影響を及ぼしたのかどうかは分からない。しかし、宗教的ではないが霊的であるというスタンスの表明が、このような形で行われていることは注目に値する。

(3) 日本における状況

SBNR というスタンスは、一見すると日本の宗教状況と類似しているように思える。ISSP 国際比較調査（宗教）2008は次のような結果を示している⁸⁾。

「あなた自身は、何か宗教を信仰していますか」

「宗教を信仰している」	：39%
仏教	：34%
神道	：3%
キリスト教	：1%
その他の宗教	：1%

「宗教を信仰していない」：49%

「“目に見えないもの”を信じるか」（絶対にある、たぶんあると答えた割合）

「祖先の霊的な力」	：47%
「死後の世界」	：44%
「輪廻転生」	：42%

この結果は、既成の宗教を信仰してはいないが、霊的なものは信じているという層が一定程度存在していることをうかがわせる。さらに年代別に結果を分析した上で、次のように述べている。

今回の調査結果からは、若い人の多くは、宗教を信仰しているわけではないのに、「靈魂」や「あの世」などの“宗教的なもの”の存在は信じている、一方、高齢者は、信仰を持ち、ふだんから仏壇を拝んではいるが、“宗教的なもの”の存在はあまり信じていない、という傾向が見られた。信仰があれば、“宗教的なもの”を信じるというわけではないようである⁹⁾。

ここで言われている若い人の多くの姿に、SBNR のスタンスは類似しているように思える。日本の若者も既成の宗教を信仰してはいないが、宗教的なものの存在を信じているように見えるが、これらは同質の現象なのだろうか。

先ず相違する点として確認しておくべきことは、西欧におけるこのスタンスは、既成の宗教、

すなわちキリスト教信仰を否定した上で成り立つものだという点である。つまり、SBNR とはがっちりとした伝統と体制に対するアンチの立場の表明なのである。それに比べ日本の若者に見られる傾向は、体制の否定を契機としてはいない。元々既成の宗教への興味も関心も関わりも無い中から、ふわふわと“宗教的なもの”に引き寄せられている姿なのではないかと思われる。

このように既成の宗教への否定の側からか、無関心の側からかの別を押さえた上でのことになるが、両者に共通するのは彼らを惹きつけているものの危うさ、怪しさではないかと思える。日本の若者たちを惹きつけるものには、例えば「死後の世界」や「輪廻転生」が挙げられるが、SBNR で言う spiritual なものというのも、メディテーションやヒーリング、あるいはチャネリングなどを指すことが多い。この中には、東洋思想やヨガの教えなどある程度体系づけられたものもあるが、超自然体験やトランス状態などの個人的な体験や、怪しげな教義の宗教集団との関係が疑われるものも存在する。状態としては玉石混淆と言って良いだろう。「スピリチュアリティ」を手がかりに、「宗教的情操」を捉え直すためには、この中から玉と石をより分けておかなければならないだろう。

3. 「スピリチュアリティ」の分析

(1) スピリチュアリティの媒介性

SBNR における「スピリチュアリティ」の質的な問題や、混乱した状況について述べてきたが、「スピリチュアリティ」は他にも多くの領域で用いられ、意味も用法も様々に入り混じっているのが現状である。さらにこのような状況を整理、分析しながら、私たちの必要に合わせて、つまり「宗教的情操」を解体、再構成する作業とどのように関わるのか、検討を進めたい。

安藤は、特定の意図や期待を持って「スピリチュアリティ」という語を用いる者を、次の3つのグループに分けている¹⁰⁾。以下に、安藤の主張を参照し筆者がまとめたものを記す。

第1グループ：医療・福祉・教育・心理療法など講義のヒューマンケアに関わる専門職全人医療や全人教育のような理念を元に、ケアにおけるスピリチュアルな次元の重要性を説く人々

第2グループ：宗教学者（特に宗教社会学者と宗教心理学者）

従来の「宗教」概念によってはとらえ切れない現代社会の諸現象を研究対象として取り込み、それらを「スピリチュアリティ」という理論的分析概念によって読み解こうとする人々

第3グループ：ニューエイジ、心霊性運動の主唱者

従来の「宗教」に代わるような新しい自己＝霊性探求の在り方を表す語として「スピリ

「スピリチュアリティ」という語を一種の運動スローガンとして用いる人々

安藤は、これらのそれぞれの分野で異なった意味や文脈において「スピリチュアリティ」の語が用いられていることに対して、それを性急に標準化したり固定化したりすることを求めず、むしろ「スピリチュアリティ」概念に見られる様々な二重性を重視する。そしてそれが異なるものを媒介する可能性を見ようとする。例えば宗教と世俗のそれぞれに異なる形で用いられる「スピリチュアリティ」の語が、世俗の側からは「一見非宗教的な現象の中に見出せる人々の宗教性や宗教への希求」を示し、宗教の側からは「硬直化し、活力を失いかけた制度宗教が再び世俗社会に向けてかける橋」と捉えて、両者を媒介する可能性を示している¹¹⁾。

(2) 「問い」としてのスピリチュアリティ

このように安藤が指摘する「スピリチュアリティ」の二重性や媒介性に期待しながらも、それでもやはり一定程度その質を査定し仕分けを行っておく必要があるように思える。それは、主に安藤による分類のうちの第3グループ、新宗教的な実践や運動の領域の問題である。ここには真摯に霊的な問題と向き合い、物質的、現世的解決ではなく、より本質的な答えを求めようとする人々が含まれているだろう。しかしその一方で、呪術的、狂信的であったり、世俗的、ご利益的であったりする人々の姿もまた目につくのである。それを区別し、仕訳けていくことは、「スピリチュアリティ」の核に近づく道でもあると思う。

ここでは、林の主張を元にしながら、考えていく。林は、「スピリチュアリティ」を暫定的に「宗教が長らく扱ってきたが、何かの宗教を信じているかどうかに関係なく、人生にとっていちばん根本的で、大切な何か。それを言い表すための言葉」¹²⁾とし、そこにある多様な含みを残しながらも、多くの人々の「参照軸」となるスピリチュアリティの理解の仕方を探ろうと試みている。その際、林が分析の方法として取っているのは、スピリチュアリティを「問い」と「答え」の位相で区別するというものである。これにより、「問い」と「答え」のそれぞれについて「スピリチュアである」か「スピリチュアでない」かの組み合わせがなされ、4つの象限に分類される¹³⁾。林が述べている各象限について、まとめて記すと次のようになる。

第Ⅰ象限 問い—スピリチュアルである 答え—スピリチュアルである

人生の意味や、究極の価値などをめぐる実存的な動機で、超越的次元・存在を肯定する世界観にコミットし、それに基づいた実践に携わる

ケア、福祉、教育などの真摯な実践、最も典型的、「正統派」のスピリチュアリティ

第Ⅱ象限 問い—スピリチュアルである 答え—スピリチュアルでない

いまだ「答え」を見いだしていない、人生の意味や自己の存在意義、大切な人の

喪失を巡る問いや苦悩

求道的な探求、終末期のスピリチュアルペイン

そうした問いが超越的次元に関わることなく充足された場合も含まれる

第Ⅲ象限 問い—スピリチュアルでない 答え—スピリチュアルでない

問いも答えもスピリチュアリティに関わらないもの

考察の対象外

第Ⅳ象限 問い—スピリチュアルでない 答え—スピリチュアルである

死後生や靈的エネルギーなど、超越的なものの存在を肯定する世界観にコミットし、それを前提とした活動・体験に関わりながら、「問い」としてのスピリチュアリティが伴っていない

オカルトブームでの興味本位の心霊への関心、金銭運、恋愛運の向上など現世利益の追求、現世的欲求の代用的満足

以上のような林の分析を元にするると、ここで私たちが問題とすべきなのは、第Ⅱ象限と第Ⅳ象限の区別だと考えられる。つまり「答え」の次元がどうかではなく、「問い」の次元がスピリチュアルであるかどうか注目すべきだということである。

我々はいついつい「答え」の方に目を向けがちである。それはそちらの方が宣伝され、公表され、発表される機会が多いからでもあるだろう。おそらく多くの場合「問い」の方は隠されている。意識的にそれを覆う場合もあるだろうし、敢えて表に出すこともないと遠慮深く懐に収められる場合もあるだろう。「問い」の次元は、プライベートな領域なのである。スピリチュアルな問いという場合、それは生きる意味、人生の意義など、自己の存在そのものにまつわる実存的な「問い」である。究極的にプライベートな「問い」だといえる。それは公にし難く、ひそかに告げられる「問い」であり、悩みであるといえるだろう。

この公に告げられることの少ない「問い」の方に注意をうながしたことが、林の主張の新しい点である。多くの領域に散らばり、質的にも様々な「スピリチュアリティ」を切り分ける上で、「答え」ではなく「問い」に注目するという方法はひとつの方法となりうるだろう。その、言わば個の存在の深淵から立ち上がってきたスピリチュアルな問いを掬い上げるということが、「宗教的情操」と呼ばれてきたことの内実を規定し、再構成していく上でも意味を持つのではないだろうか。

4. スピリチュアルブームとカルト問題

(1) スピリチュアルブームのとらえ方

スピリチュアリティについてここまで議論を進めてきたが、社会的状況の中で、この問題がどのような現実と絡んでいるのかを次に見ていく。それを通して、これまで分析してきた「スピリチュアリティ」という捉え方が、現実の中で有用であるのかどうか、どうすれば有用となるのかを考えたい。

まず「スピリチュアルブーム」と呼ばれている近年の状況について考える。中村は、2011年当時日本で行われていた「スピリチュアルなものへのあこがれ」を「スピリチュアルブーム」ととらえ、社会学心理学の領域でこれを考察した論文の中から、それが受容されている要因を次の6つの仮説としてまとめている¹⁴⁾。

1. 自己責任が強調される風潮に耐えられない個人化した自己が求める「癒し」への希求
2. スピリチュアルな言説が既成宗教の言説と連続している感覚の忘却
3. 「内キャラ」の動機付けを正当化させようとする思い
4. 「大きな物語」への依存と忌避を並立させようとする思い
5. 望ましい心理的影響のみを求めるプラズマティックな心理主義
6. TVメディアの培養効果

この研究では、これらを量的調査のデータで裏付けることを試みたが、分析の結果はすべての仮説は棄却されたと結論されている¹⁵⁾。しかし、調査での裏付けはできなかったとしても、各仮説はスピリチュアル・ブームの背景を説明する視点とはなるだろう。注目すべきは、これら6つの仮説の内に、先に述べた「スピリチュアルな問い」を明確に含むものがないということである。2.については「スピリチュアルな言説」が何を指すのかが不明ではあるが、他の仮説にある「癒し」「内キャラ」などに実存的な問いがあるようには思えない。先に記した林が分類に従えば、第IV象限の中にほとんどのものが位置するように思われる。つまり問いはスピリチュアルではなく、答えにのみスピリチュアルを求める群に属すわけである。

このように捉えていくと、いわゆるスピリチュアル・ブーム全体の軽さが具体的に見えてくるように思われる。またその中に紛れ込んでいる真正の「スピリチュアリティ」を拾い上げる視点ともなりうる。もし問いの次元が実存的であるとすれば、現象的には同じように見えても、それとは質が異なる可能性があるかと捉えられるのである。

(2) カルト問題

もうひとつ、現実の社会的事象の中から、いわゆるカルト問題を取り上げる。「カルト」と

は、元々はラテン語で「崇拜」や「儀礼」を意味する *cultus* を語源とするが、現在では、カリスマ的指導者を中心とする熱狂的な宗教集団を言い表す際に使われる。1990年代に起こったオウム真理教事件以来、このカルト問題が日本でも注目され、警戒されるようになった。宗教的なものを求めながらも既成の宗教には向かわず、彷徨っていた人たちを飲み込んだのがカルトであるとするなら、装いとしてはこれもまた「スピリチュアリティ」を標榜し、「ここにこそ答えがある」と告げるものであった。

カルトに惹きつけられた人々の「問い」の次元は、スピリチュアルであったと言えるのだろうか。もちろんケースバイケースではあるが、総じて「生きる意味」や「人生の目標」を求めよう実存に関わるものだったのではないだろうか。しかし、カルト問題について「問い」の次元を探るべき対象は、それに惹きつけられた人々ではなく、カルト教団内の指導者であるだろう。始まりの時点では、それらの人も実存的な「問い」を持っていたのかもしれない。しかしカルト教団化した後はそうではないだろう。現世的、権威的な力への欲求がそれにとって代わったということになる。ちなみに「答え」の次元についても、指導者たちは現世的、物質的であることを知りながら、それにスピリチュアルな装いを施していただけだと言えるのではないだろうか。

このようにカルト問題を捉えることがもしできるとすれば、信者は先の分類では第Ⅰ象限に位置づけられ、指導者は第Ⅲ象限に位置づけられる。カルト教団の内に見られる意図的、作為的な構造がここからは浮かび上がってくると言えるだろう。

5. これからの展開

(1) 授業実践に向けて

以上、「スピリチュアリティ」に関する知見を整理し、そこから「宗教的情緒」に代わるものを立ち上げるための手がかりを得ようと試みた。その結果、「スピリチュアリティ」を「問い」と「答え」の2次元で捉え、特に「問い」の次元がスピリチュアルなものであるかを確認することによって、社会的な宗教事象を分析できる可能性が示唆された。

このことを宗教科教育の内容と重ねて考えるならば、例えば宗教科の授業の展開を考える上で、その学習がスピリチュアルな問いから始まるものであるのか、あるいはその学習が答えをスピリチュアルな次元に求めようとするものであるのかという視点を持つことが重要であると言えるだろう。そして、例え答えをスピリチュアルなところに求めなくとも、問いがスピリチュアルな次元にあるものであれば、宗教教育の内に位置付けられる可能性はあるとも考えられる。

スピリチュアルな次元の問いとは、例えば「生きる意味」「人生の意義」であった。思春期を

生きる中学生、高校生にとって、これは誰もが一度は抱く問いではないだろうか。この問いに真摯に向き合おうとする姿勢、授業の実践を通してその問いに何とか水路を開き、答えを探す海原へと導くための試み、それを広い意味で宗教科教育の内容と捉えても良いのだろう。そのような授業実践の具体的な姿を作り出すことが、实际的に「宗教的情操」の内実を超えていくことにもなるだろう。

宗教科教育の学びを進める上で、もちろん理論はそれとして重要ではあるが、授業の形にまとめてこそ具体的な姿となる。特に曖昧さが拭えない、「宗教的」な、「スピリチュアル」な、あるいは「実存的」な主題についてはそうであるだろう。実践と理論の往復運動が、ここではどうしても欠かせないことであり、それを通して相互に練り上げられていくものなのである。

(2) 残された課題

宗教科教育について、ここまでで理論的な学びを終え、次からは実際の授業を構想する段階へと進んでいく。これだけの元手で授業づくりに向かうのかと、心許ない思いがあるかもしれない。抽象的、理論的な問題に偏り、しかも多岐にわたる領域でバラバラの論議を紹介してきた印象がぬぐえない。それぞれに、今後宗教科教育に取り組んでいくにあたっては、外すことができない、根元にあると思われる問題を拾い出してきたつもりであり、現在のトピックの中から、象徴的な出来事を話題としてきたつもりでもある。授業の具体的な姿が像を結ばないのは、実際の授業の例を挙げる余裕がここまでなかったからだろう。これが現時点で残っている課題といえる。

様々な試みが、スピリチュアルな内容に取り組んだ授業実践がこれまでに行われている。それは例えば「いのちの教育」と呼ばれるものの中にあり、「環境教育」と呼ばれるものの中にある。あるいは「人権教育」や「平和教育」の領域に属するものにもある。教科の枠で考えても「道徳」に限らず、「社会」「学活」「総合的な学習」「保健体育」などバラエティに富むことになるだろう。

具体的なイメージを喚起するためにも、実践例を先に出すべきだったのかもしれないが、できるならまっさらなところから授業づくりに向かってもらいたいと考えた。先例のイメージも何もないところから、取り敢えずは自力でできるところまで想像力を広げて、自分なりの宗教科教育の授業を作ってもらいたいと考えている。

その後に、様々に積み上げられてきている授業実践の例に触れていくことにしよう。そうすることによって、もう一度自分の作った授業プランをふり返り、何をスピリチュアルな問題と捉え、何を実存的な問いと捉えていくのかという課題がより明確になると期待している。

注

- 1) 野口 真「日本的宗教観と宗教教育」, 西南学院大学教職論集 第1巻1号, 2018
- 2) 野口 真・濱野道雄「宗教教育の課題——「宗教的情操」を手がかりとして——」, 西南学院神学部論集 第74巻 第1号, 2017
- 3) 野口 真・濱野道雄「宗教教育の課題——「宗教的情操」を手がかりとして——」, 西南学院神学部論集 第74巻 第1号, 2017, p.108
- 4) 野口 真「日本的宗教観と宗教教育」, 西南学院大学教職論集 第1巻1号, 2018
- 5) 公益財団法人日本 WHO 協会のホームページ トップページ > WHO を知ろう > 健康の定義について <http://www.japan-who.or.jp/commodity/kenko.html>
- 6) 公益財団法人日本 WHO 協会のホームページ トップページ > WHO を知ろう > 健康の定義について <http://www.japan-who.or.jp/commodity/kenko.html>
- 7) <https://ja.wikipedia.org/wiki/スピリチュアリティ>
- 8) 西久美子「“宗教的なもの”にひかれる日本人～ SSP 国際比較調査（宗教）から～」放送研究と調査 2009年5月号、NHK 放送文化研究所、2009
- 9) 西久美子「“宗教的なもの”にひかれる日本人～ ISSP 国際比較調査（宗教）から～」放送研究と調査 2009年5月号、NHK 放送文化研究所、2009, p.73
- 10) 安藤泰至「越境するスピリチュアリティ—— 諸領域におけるその理解への開けへ向けて——」, 宗教研究 80 (2), 日本宗教学会, 2006, p.74-75
- 11) 安藤泰至「越境するスピリチュアリティ—— 諸領域におけるその理解への開けへ向けて——」, 宗教研究 80 (2), 日本宗教学会, 2006, p.79
- 12) 林 貴啓「問いとしてのスピリチュアリティ——「宗教なき時代」に生死を語る」京都大学学術出版会, 2011, p.iii
- 13) 林 貴啓「問いとしてのスピリチュアリティ——「宗教なき時代」に生死を語る」京都大学学術出版会, 2011, p.30-35
- 14) 中村晋介「「スピリチュアル・ブーム」をどうとらえるか—— 福岡県内の大学生を対象とした意識調査より——」福岡県立大学人間社会学部紀要 Vol.19, No.2, 2011, p.27
- 15) 中村晋介「「スピリチュアル・ブーム」をどうとらえるか—— 福岡県内の大学生を対象とした意識調査より——」福岡県立大学人間社会学部紀要 Vol.19, No.2, 2011, p.28-29

西南学院大学・神学部・神学科（非常勤講師）